学術分科会における主な人文学・社会科学関係報告の概要

（１）人文学及び社会科学の振興について（報告）（平成２１年１月２０日学術分科会）

（２）リスク社会の克服と知的社会の成熟に向けた人文学及び社会科学の振興について（報告）（平成２４年７月２５日科学技術・学術審議会学術分科会）

（３）学術研究の総合的な推進方策について（最終報告）（平成２７年１月２７日科学技術・学術審議会 学術分科会）

「人文学及び社会科学の振興について（報告）」概要
（平成２１年１月２０日 学術分科会）

第一章　日本の人文学及び社会科学の課題

第一節　「研究水準」に関する課題

欧米の学者の研究成果を学習したり紹介したりするタイプの研究が有力な研究スタイルとなってしまっている。日本の歴史や社会に根ざした研究活動が必ずしも十分でない。

第二節　「研究の細分化」に関する課題

「認識枠組み」の創造という人文学及び社会科学の役割・機能を果たしていくためには、研究分野や研究課題の細分化と固定化が進みすぎている。「歴史」や「文明」を俯瞰することのできる研究への取組が期待されている。

第三節　学問と社会との関係に関する課題

日本の社会的な現実を欧米の学説の適用によって説明するにとどまらず、独自の学説により理解していくことへの期待が大きい。また、最先端の課題は、社会の側にあることからも、学問と社会との対話が必要。

また、学問が社会的存在として認知され支持されるためには、社会全体に対して文化を醸成していく様々な活動についても積極的に考慮すべき。

第二章　人文学及び社会科学の学問的特性

第一節　対象

基本的に人間によって作られたものや「価値」それ自体が研究対象。社会科学では、構成主体の行動の相互作用に関する因果関係のみならず、行動の背後にある「意図」の形成に関する因果関係の解明が必要。

第二節　方法

人文学及び社会科学は、証拠に基づき事実を明らかにするとともに、論拠を示すことにより意味付けを行う。このため、対話的な方法（相対化の視点を前提とした「総合」のプロセス）による「普遍性」を獲得するとともに実証的な方法（意味解釈法、数理演繹法、統計帰納法）により「現実」を明らかにすることができる。

第三節　成果

人文学及び社会科学が「分析」の学問であると同時に「総合」の学問であることから、「総合」による「理解」が、社会の側から成果をとらえた場合に意味を持つことを指摘。また、成果には「実践的な契機」が内包されていることに留意が必要。

第四節　評価

人文学及び社会科学の評価に当たっては、学問の特性に起因する多元的な評価軸の確保の必要性、学術誌の査読の限界の認識の必要性、及び定性的な評価の重要性について留意が必要。

第三章　人文学及び社会科学の役割・機能

第一節　学術的な役割・機能

人文学及び社会科学の役割・機能として、個別諸学の基礎付け（理論的統合）、実践や社会の中で生起する最先端の課題への対応がある。

第二節　社会的な役割・機能

異文化コミュニケーションの可能性の探索や多文化が共存可能な社会システムの構築に向けた考究、個別諸学の専門性と市民的教養との架橋、政策や社会における課題の解決という役割を担っている。

また、人文学の役割・機能として「教養」の形成がある。さらに、社会科学の役割として、「市民」における政策に関する基礎的な判断能力の涵養に向けての取組、人文学及び社会科学における、高度な「専門人」の育成という役割・機能がある。

第四章　人文学及び社会科学の振興の方向性

第一節　「対話型」共同研究の推進

国際共同研究の推進、異質な分野との「対話」としての共同研究の推進。

第二節　「政策や社会の要請に応える研究」の推進

政策や社会の要請に応える研究を積極的に推進する必要がある。その際、研究プロセスの中で経験的な妥当性を一定の証拠に基づき立証していくことが要請されるため、実証的な研究方法が不可欠。

第三節　卓越した「学者」の養成

独創的な研究成果を創出できる人文学者及び社会科学者の養成が必要。そのために、幅広い視野を醸成するための基礎訓練期間の定着や独創的な研究成果を創出した学者の評価が必要。

第四節　研究体制、研究基盤の整備・充実

国公私立大学を通じた共同研究の促進や研究者ネットワークの構築、並びに学術資料等の共同利用促進など、研究体制、研究基盤整備を抜本的強化が必要。また、現地調査を中心とした研究、シミュレーションの手法を用いた研究、実験的な手法を導入した研究の支援が必要。

第五節　成果の発信

読者を社会において獲得する視点とその延長として、大学等における教養教育の充実が必要。また、海外の理解と関心の獲得が必要。

第六節　研究評価の確立

人文学及び社会科学の評価に当たっては、多元的な評価軸に基づいた評価が必要であり、特定の専門分野内部のみの評価にとどまらず、外部の視点も踏まえた評価が必要。また、定量的な評価指標を可能な限り設定しつつも、定性的な評価指標が評価の実質を担うべきであることを確認。

「リスク社会の克服と知的社会の成熟に向けた人文学及び社会科学の振興について（報告）」概要

（平成24年7月25日　科学技術・学術審議会 学術分科会）

○社会の安寧と幸福に貢献すべき学術として、どのように人間・社会等に向き合い、研究活動を行うべきか、という設問に答えるべく、今後の人文学・社会科学の在り方などについて検討。

○平成23年5月～平成24年6月まで９回の審議

社会に内包される問題に向き合うことを特に当面する緊急な課題と考え、３つの視点から課題を抽出・整理し、５つの推進方策を提言。

１．人文学・社会科学の振興を図る上での３つの視点

急速に進む専門化を優先させて細分化に陥り、知の統合や分野をこえた総合性への視点が欠落していた。

（1）諸学の密接な連携と総合性

分野による方法論や価値観の違いが存在することを相互に理解し、お互いに補完し合うよう、十分に議論を行いながら研究を進める。

今般の災害や社会の高度化・複雑化を背景に、研究の社会的機能の発揮が期待されている。

（2）学術への要請と社会的貢献

研究者が多様な社会的活動に参画するとともに、社会の側に研究への参加を求めることで、社会的要請への積極的な応答を試みる。

母国語特性に固執するあまり、外国籍や外国由来の活動に対して消極的な対応も稀ではなかった。

（3）グローバル化と国際学術空間

受身の形でグローバル化に対応するだけではなく、日本由来の学問領域を国際的な交流の場に引き出すことを責務の一つと考え、リーダーシップを取ることで貢献・寄与する。

２．制度・組織上の４つの課題

（1）共同研究のシステム化

○研究推進事業・制度の安定的・継続的な運営が必要

○研究成果を社会実装につなげていくために、個々の支援事業の枠組みをこえてプロジェクトを展開していける仕組が必要

（2）研究拠点の形成･機能強化と大学等の役割

○多数の研究者の組織的な参画を可能とする拠点機能の活性化、拠点間の相互連携が不可欠

（3）次世代育成と新しい知性への展望

○実社会と学術の関連性を追求する教育プログラムの実施が必要

○適正な評価制度に基づいて人材育成を行うことが重要

（4）成果発信の拡大と研究評価の成熟

○分野間で成果や評価の視点が異なることに留意。実社会からの視点を意識する必要

○成果が出るまで長い時間を要する研究への挑戦も評価すべき

３．当面講ずべき５つの推進方策

（1）先導的な共同研究の推進

【課題設定による先導的人文学･社会科学研究の推進】

○下記の３つを目的とした共同研究を支援する枠組の構築
- 「領域開拓」を目的として諸学の密接な連携を目指す研究
- 「実社会対応」により社会的貢献を目指す研究
- 「グローバル展開」を目指す研究

○評価結果に基づいて延長を可能とする支援の枠組の構築
○海外における人文学・社会科学の学術動向の継続的な把握
○若手研究者支援枠の導入
○推進すべき共同研究の課題を設定

【設定すべき課題の例】

・非常時における適切な対応を可能とするための社会システムの在り方
・社会的背景や文化的土壌等から発想する新たな科学技術や制度の創出・普及
・アジアの協調的な発展を目指した科学技術の制度設計

【事業･制度の枠組みをこえた展開】

○「課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業」（JSPS）のプロジェクトの成果が自然科学にも貢献する場合における、より実装段階に近い共同研究への波及による更なる展開
○科研費の「新学術領域研究」等における適切な評価による更なる展開

（2）大規模な研究基盤の構築

【研究拠点の充実･強化･連携】

○共同利用・共同研究拠点の取組状況等も踏まえた拠点化への支援

【大型プロジェクトの推進】

○研究者コミュニティの合意、実施主体、共同利用体制、計画の妥当性等を踏まえ、社会や国民の幅広い理解を得ながら、長期的な展望をもって戦略的・計画的に推進
例）日本語の歴史的典籍のデータベース構築

（3）グローバルに活躍する若手人材の育成

○優れた資質を持つ若手研究者の海外派遣
○若手研究者の多様なキャリアパス確立に向けた取組
○教員のグローバルな教育力向上、学生の留学促進のための環境整備、海外の大学との教育連携
○グローバルに活躍するリーダーの養成

（4）デジタル手法等を活用した成果発信の強化

【国際情報発信力強化のための科学研究費助成事業の改善】

○国際情報発信力強化のための取組の評価や、オープンアクセス誌の刊行支援などに向けた科研費（研究成果公開促進費）の制度改善

【機関リポジトリの利活用等による教育研究成果の発信】

○大学等における、機関リポジトリの整備、意義について所属する研究者の理解を促進

（5）研究評価の充実

○レビューの在り方の議論を深めつつ、人文学・社会科学の特性を踏まえて評価の項目を充実
例）・様々な成果発信やアウトリーチ活動
・漢学や日本語等における索引や目録の作成
・日本語希少原典の優れた文学研究の外国語への翻訳、国際共著論文、海外での研究活動等

報告書全文は、文部科学省ＨＰからダウンロードできます。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/023/index.htm

「学術研究の総合的な推進方策について（最終報告）」

(平成27 年1 月27 日 科学技術・学術審議会 学術分科会)

【「人文学・社会科学の振興」関係個所概要】

重要性等

○ グローバル化等に伴い急激に社会が変化し、新たな諸課題が登場する中、人文学・社会科学は、多様な文化や価値観に対する認識を深めるとともに、人類を平和的共生へと導くべき使命を帯びていることから、重要性が従来以上に増加。

○ また、人文学・社会科学には、新たなものの見方や制度的仕組みの設計と提案により、社会の変革の源泉となるというイノベーションに果たす固有の役割に加えて、自然科学の研究成果が生み出すイノベーションを社会の変革につなげる役割も期待。

現状・課題

○「リスク社会の克服と知的社会の成熟に向けた人文学及び社会科学の振興について（報告）」（平成２４年７月学術分科会）が指摘しているように、細分化された専門分野の精緻化に固執する余り、分野を超えた知の統合から生まれる巨視的な視点が欠落しがちであること、例えば、文献学的な視点のみならず社会がはらむ諸問題に視点を移すことが必要なこと、また、国際発信や国際的な学術コミュニティーへの参画に必ずしも積極的でない場合があることなどが課題。

求められていること

○ 今後、人類の福祉の改善に貢献していくためには、諸学の密接な連携や国際的な学術展開、社会的・国際的な要請への貢献を実践する共同研究の先導的なモデル形成等を通じ、グローバル化の加速度的展開に呼応して新たな研究領域を創出することが必要。

○ 公的資金による支援や社会の負託に応えるためにも、人文学・社会科学は、個々の研究者が自己の研究成果と現代社会に果たす役割や貢献の意義を一層積極的に発信するとともに、学術界全体が社会的意義を絶えず再検討し、将来的な展望を広く社会に提示することが必要。

○ 社会的理解を得るため、また、自らの研究活動を見直す契機とするためにも、自然科学とは異なる特徴を踏まえた評価の基準を明確にし、独自の評価基準の可視化が必要。